

地域の活性化と人づくり

穂別町農業活性化の方策と その背景について

専修大学北海道短期大学

教授 佐久間 衛

はじめに

穂別町初代の横山村長が電源開発の安全祈願と村民の心の拠り所として仏像を建立したことは、四〇年前から東京在住の佐藤寛氏を通して知っていた。それで一度は穂別町の地を訪ねてみたいと念じつつ交通の不便さもあつて果たせないでいたが、この度白老町の農業振興計画に関連して、横山村長の思想と村づくりの構想が、その後四〇年近くの歳月を経て、どのように生かされているかを知つてみたい気持ちに駆られた。

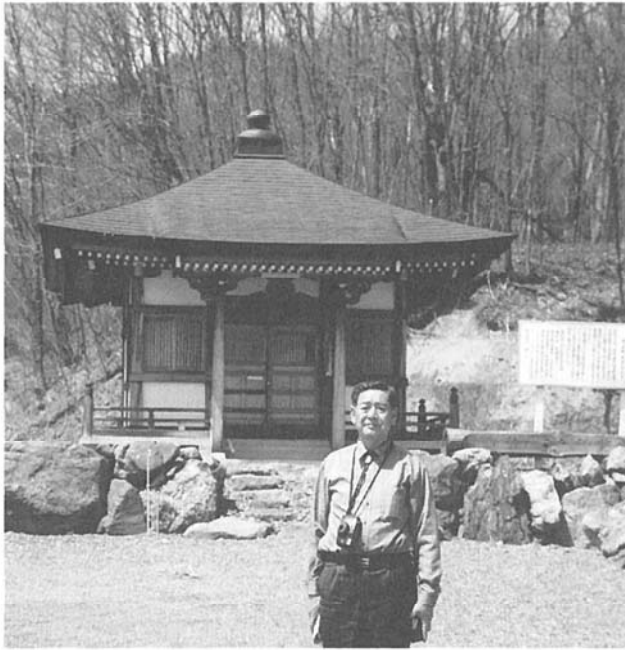
幸い今春、訪問の機会を得て所期の目的を達することができた。時を経て一般市民の意識からは忘れ去られていたが、実はリーダー層には横山村長の生き様と共に「われらのまことの幸福を求めよう。求道すでに道である」という宮沢賢治の理想は引き継がれていた。そのことが、穂別町のユニークな町づくりにつながっているのである。そこで以下簡単に視察結果を基に穂別町農業のユニークさの背景について述べてみたい。

一、穂別町農業の概況

穂別町農業の主な指標について示すと、次の通りである。

- ① 耕地面積は、田一、一五七畝（減反率四〇％）、畑三三五畝 牧草地六三八畝
- ② 農家戸数は、三三〇戸（うち農協組合員戸数二〇戸）
- ③ 専業九六戸（うち高齢農家四四戸）、一兼三三戸、一兼九三戸、総計三〇戸
- ④ 農業粗生産額は、（平成三年）一八億七千万円、（平成四年）一五億七千三百万円
- ⑤ 作目別粗生産額は、（平成四年）米（六億七千万円）、メロン（四億六千万円）、長いも（七千万円）、肉牛（一億二千万円）

農業生産の柱は、米とメロンであるが、穂別町の有機農産物は、肉牛との複合によって支えられている。約五〇戸の農家がメロンを作り、肉牛を一五頭前後飼養している。これらの米をベースにした複合経営が基幹的経営方式で、これらの農家はいずれも後継者が確



▲穂別町観音堂の前に立つ佐久間先生

保され、しかも未婚者は一〇%位
というから驚く、親の代にはアス
バラガスで家を建て、息子の代で
はメロンで息子達夫婦の家を新築
しているのが目についた。

穂別町のハウスメロンは、堆肥
が十分入っているので平取町のト
マトと同様、連作障害は無いとい
う。このように減農薬有機栽培の

野菜も、肉牛による大量の有機物
の投入によって成り立っているの
である。稲作農家で肉牛のいない
農家は、農協がパーク堆肥を四、
五千トンを札酪農協から購入し、
本来は五千円/ものところを町が
補助して五百円/もて供給してい
る。

穂別町の農業は、中山間地帯に

おける複合経営のモデル的成功例
である。しかも町の「健康づくり
宣言」に基づいて、全町的に有機
農法を推進している道内唯一の成
功例でもある。ただ将来の課題と
しては、後継者が確保されている
のは約四〇戸で、一、五〇〇畝の
農耕地を今後どう守っていくかが
課題である。将来は法人を設立し
て、そこで高齢農家の労働力をも
活用する経営形態の展開が求めら
れてくるだろう。農協組合長の頭
の中にも、既にそうした構想が描
かれている。

二、穂別町における

町づくりの歴史的考察

昭和二年四月、初代民選村長
として横山正明氏が就任した。氏
は穂別村の資産家として御三家の
一人であり当時商工会の会頭を努
めていた。

村長就任後は、政策の三本柱と
して、①農村の無電化地域を解消
するため、アメリカのテネシー峡
谷の電源開発(T.V.C.)に
倣って、穂別村独自に自力で電源

開発をしようとした。日本版「穂
別T.V.C.」というわけであ
る。②は教育の普及である。昭和
二六年に村立穂別高校を設立、ス
クールバスを走らせ、夜学も開校
し、教育機会の均等を目指した。
発足当初は優秀な教員を集め、こ
の僻村から東大や北大に進学する
生徒も出たという。③は、公民館
活動の興隆によって住民の文化・
教養の向上を志向したことである。
具体的には、洋裁、木工の講習会
や教養講座などであった。

要するに、人づくりを中心に据
えながら同時に住みよい環境の改
善を考え、村立国保病院を開設し
たり、六五才以上の医療費を無料
にするとか、大学進学者に奨学金
を支給するなどした。ただ政策の
狙いはよかつたが、時代を先取り
し過ぎて財政収入とのバランスを
欠いていたと言わねばならない。

つぎに、横山村長は、明るい村
を創造していく精神的拠り所とし
て、昭和一九年一月穂別村の守
護神として高名な彫仏師の手にな
る「観音菩薩像」を完成させ、そ
の菩薩像は村人の家々を転々とし、



▲メロンの苗

各集落で観音講を行っていた。今は旧富内駅の裏手に観音堂を建立し、理想郷の夢を託して安置されている。

ところで横山村長と賢治思想の出遭いは、どんな偶然によるものだったのか、それは浅野晃氏との出遭いに始まる。浅野氏は東大卒で戦前共産党に入党、戦時中転向して出所、終戦後は国策バルブの常務だった同じ転向組の水野氏を頼って苫小牧に疎開してきたものである。会社では大した仕事もないので、彼は近隣の町村に出向い

て短歌や詩作仲間と交流し、指導していたと言われる。横山村長は、そこで浅野氏と親しくなり、浅野氏の人格に傾倒していった。考えれば全く不思議な出遭いである。さらに、刑務所で短歌の指導をしていた佐藤寛氏を、浅野氏を紹介して知ることになり、ここに横山村長と佐藤寛氏との人的つながりができたわけである。佐藤寛氏は岩手県出身で宮沢賢治に私淑していたから、ここで横山村長は佐藤寛氏との交流が深まり、宮沢賢治の思想に共鳴していくことになったものである。

賢治思想とのつながりはこれ位にして、村長としての横山氏をみると、政治家という性格よりも、思想家としての素質があったのではないかと思われる。穂別村は、電源開発への投資から村の財政規模の五年分もの負債を抱え、横山村長は必死の思いで一族の私財までつぎ込み、赤貧洗うが如き生活であったという。客観的には無謀ともいえる開発計画であったが、私心を顧り見ることなく、理想郷建設を夢みて孤軍奮闘した横山村

長の生き様が、今日も町民、特にリーダー層の心の中に強く焼きついているのであろう。

今も賢治観音にちなんだイベントが毎年行われており、それらを通して四〇才以下の若者にも影響を与えつつあることを知った。現町長も基本的には、横山村長の考え方を継承していくと言い切っている。昭和五年の「健康の町づくり宣言」も、横山村長の思想の延長線上に生まれてきたものである。

横山村長が退陣した後、昭和二十一年八月から中村氏が二代目村長として就任、電源開発の負債整理に全力投球し、無事解消して昭和四六年には北電に電源施設を移管している。

中村氏は、大正期にアンマークで酪農研修した経歴があり、やはり穂別村の御三家の一つに入る資産家であった。

政策の重点は、①財政再建、②町有林一、〇〇〇畝の植林、③義務教育施設の整備、④水道施設整備事業等であった。第二次中村村政においては、一五〇畝の造田と

和牛の導入が行われ、そのことが今日の有機農業の基礎となっている。

昭和四七年八月から三代目村長として横山良夫氏が選ばれた。初代横山正明村長とは従兄弟で、議会議長、商工会長、消防団長を歴任している。

三代目横山町政の柱は、①穂別町を都市近郊農村と位置づけ、道央圏の食糧基地とする、②生活環境づくり、③観光というものだった。福祉センターと役場庁舎を結びつけて新設されたのもこの時代であり、時代の流れに沿って国民休養地の指定も受けた。昭和五三年には、「人間健康宣言の町づくり」構想を打ち出すが、陰のお膳立て役は現在の原町長であったと言われている。

ともあれ、二代目、三代目の町政は、トップ・タウンというよりも課長提案によるポットム・アップの性格が強かったようである。職員の人づくりが進んでいれば、それで不都合はなかったのである。第四代目は原町長である。原町長の時代になって町長の個性が強

く出てきた。いきおいトップ・タウンの性格が強くなる。国際化時代を迎えて変化の激しい社会状況の中では、むしろトップ・タウン型のリーダーが期待される。そして横山初代村長時代の町づくり理念をいま一度蘇らせようとしているかに見える。

三、地域農業活性化の諸方策

ここでは穂別町が、地域の活力を引き出すために、どんな方策を実施してきたか、あるいはどんな点が大切な要件かについて述べてみたい。

(一) 人づくり

地域農業振興のカギが人づくりにあることは、今も昔も変わりはない。穂別町では、毎年、道立立推進協議会主催の「移動村づくり大学」に青年層を中心に送り込んでおり、OB会も作られている。そのOB会は単なる親睦の場としてでなく、将来に向かっでの討議もなされている点に注目したい。「移動村づくり大学」の効果は他の研修活動に比較して最も効果があ

大きかったとみられている。

有機農業についても、移動村づくり大学で有機農業の必要性を耳にした青年たちが二三人で試みたことが最初だった。町が「健康町づくり宣言」を出したのは、その後のことである。

(二) 情報収集

地域農業振興にとって大事なことは、関係機関からの情報収集能力である。町史を編いて、その情報収集のバリエーションの多様さに驚いた次第だが、そのカギの一つは、「移動村づくり大学」への参加にあった。それらの参加を通してそれぞれに必要な情報は、どこか門を叩けばよいか分かってきた。どこにどんな人がいるのかも分かってきたという。

(三) リーダーのビジョン

原町長は、発想の豊かな人で、どちらかと言えばトップダウン型である。変化の激しい時代にあつてはトップダウンの長期的ビジョンの有無が、地域農業の将来を左右することになる。

但し、町主導型は、農民の依頼心を助長することになりかねない側面も持っている。町長自身は、ビジョンを具体化するためには町民の合意が必要であり町民の教育啓蒙活動が欠かせないと感じている。農協においても長期的ビジョンが必要なことは言うまでもないが、穂別町の現状は、町のビジョンを受けて、農協が具体的実践方策を計画する構図になっている。

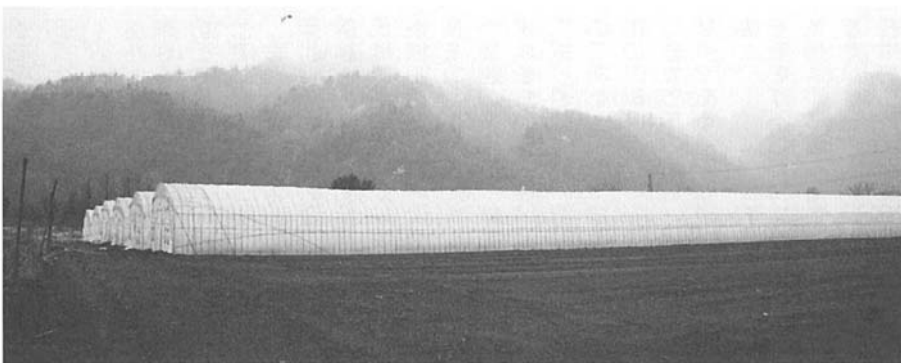
二代目、三代目の町長時代は、所管課長からの提案によつて政策課題を設定することが多かったというが、その裏には職員研修の機会が、本人の希望によつて十分与えられていることに注目しなければならぬ。例えば札幌で講演会があれば、業務に支障を来さない限り、出張扱いで出てくれるのである。

(四) 関係機関の連係

関係機関の連係がよいことも、農業振興における重要な要件の一つである。

穂別町における関係機関の連係は、非常によいが、先述したよつて、

◀メロンのハウス



行政側が機関車役である実態は否めない。しかし農協規模が組合員数二二〇戸という小規模農協であることを考慮すると、それも止むを得ないであろう。

農業センターには、農協職員のほかにも職員が三名出向している。

(五) 作目別部会活動

部会活動は農家の手で自主的に設立され、きわめて活発である。勝手な行動をとる者がいれば、組織から除名するほどの厳しさをもつて臨んでいるという。

なお集落組織は不活発なようだが、それは個別経営が中心だから



▲穂別町和牛

で将来、専業・兼業、高齢農家を含めて、集落としてどうやって飯を食っていかなければならないかという課題に必ず直面するであろうし、離農跡地の処分の問題も発生して来る。そのときは、集落が調整機能を発揮しなければならぬことを知っておくべきである。地域ごとに法人を設立していく場合においても、集落内での合意形成や調整の問題がもち上がってくるであろう。

(六) 市場開拓

穂別町の農産物は減農薬有機栽培という差別化商品であり、販売においては生協との契約栽培とか、あるいは卸売市場を仲介したダイエーとの産直(メロン)、東京都との特産米の契約出荷など、農協のみならず町長自らも販路開拓に努力している点は評価したい。

四、穂別町に学ぶもの

穂別町に学ぶべきものは、理想郷づくりの哲学というか理念ではないか、物質的豊かさの追求のみでなしに、人間関係や文化教養ま

で範囲を広げた心の豊かさ、真の人間の幸せの追求にあると言えよう。そうした理念の種を播いたのは、初代の横山正明村長だった。それは「雨にも負けず…」の詩に代表される宮沢賢治の精神を理念とした村づくりの推進であった。ここでは、政争もないし「足引つ張り」もない。穂別町のリーダー層には、横山村長の思想が、明確なものではないにしろ、受け継がれていると感じた。

農協組合長の古川幸司氏は、「農家所得の増大は必要なことだが、それにも増して家庭の円満、集落内の相互扶助、そうした人間関係のよいことが、物の豊かさ以上に人間の幸せにとつて大事なことだ」と力説していた。このように初代村長の生き様が今も後輩たちに語りつがれて、間接的には宮沢賢治の精神が生きているのである。電源開発で巨額の負債を抱え込んだというマイナスイ面があったにも拘わらず、横山初代村長が名誉民第一号に選ばれた事実をみても、氏が町民からいかに敬愛されていたかが分かるであろう。

最後に、ここで哲学というか理想を農業者、あるいは関係者が学ぶことの意義について考えてみたい。

一般には、農業経営の発展は、単なる農業経営技術の問題と割り切られ易い、しかし、果たしてそうだろうか。

今から三〇年前のことであるが、甲府近郊の果樹地帯を訪ね、農政評論家の稲村半四郎氏に会った。氏は戦前、農民運動の闘士で、戦後は旧富士見村(現石和市)の村長をつとめた方である。氏は「農業経営の成果は、立地条件だけで決まるものではない。むしろ農業に取り組む姿勢の問題だ」というのである。事実、富士見村は笛吹川の流域にあり、三米位の砂利層の底から昔の土壌が出てくるような所である。米など作れるはずがない。しかし、そこでは桃や桜桃を栽培することで、真土の沖積土地帯よりも豊かだといっているのである。また八ヶ岳の山麓に広がる野辺山村は高冷地で、戦後開拓者が入植した地域だが、県の指導での畑酪複合経営を続けたが、生活が成り

立たず離農者が続出した。そこで残った仲間は、高冷地という特色を生かして高冷地野菜を夏場出荷したらどうだろうということになった。そこで群馬や長野の高冷地野菜の経営を視察して、その方向に間違いないことを確信し、今日では有力な高冷地の野菜産地になつてゐるのである。したがつて、

稲村氏は、人間の物の考え方こそ大切なんだと強調し、当時山梨大文学部の先生方と毎月一回、文学や哲学の勉強会を行っていますという話だった。

もう一つ例をあげてみよう。渋谷悠蔵氏は、社会党の代議士になる前は農民運動家であり、青森市新城（旧新城村）でリンゴ園を経営していた。そして、農村の子弟を集め、毎週水曜日之夜は技術の勉強を、土曜日之夜は哲学思想の講義をしていた。渋谷氏は、地域農業を革新し、新しい農業を創造していくには、科学的技術と思想性を持たなければと信じていたのであろう。

哲学思想の勉強などは、目に見える形で成果は出てこないが、人

間の幸せに係る根本問題だし、長期的に見るとしつかりした思想をもつていてこそ事業は成功するものである。

西欧文明がキリスト教を基盤に発展してきたように、農業経営や地域農業の発展も、精神的、思想的基盤があつてこそ成功するものだろう。

空知の峰延農協は、「報徳思想」を核に農協運営を続けてきた。それは農協の創立者小林篤一氏の発想によるものである。今日も報徳研修会には、青年部、婦人部、職員を交代で毎年送り込んでおり、農協広報誌にも「報徳翁夜話」の一句が必ず掲載されている。ここに峰延農協の強さの根源があるのである。会議の席で職員の中から「自助努力」などという言葉が無意識に出てくるのには驚かされたものである。

ここでは思想性を培つことの重要性について述べてきたが、実践的に考えると、「報徳思想」の普及を図ることが、受け手にとつても最もわかり易く、また、「北海道報徳会」のような組織もあつて

農家に普及する上から条件が揃つているように思う。

原町長が苦小牧日報にいた斎藤征義氏を町職員としてスカウトしてきたのも、横山村長の行動を通して宮沢賢治の精神を町民に滲透させたいというところに狙いがあつたものと思われる。その意味では、斎藤氏は、北海道宮沢賢治研究会の事務局長でもあり、最適任者である。

道内を見渡しても、穂別町のよう理想郷づくりの哲学を基盤に町づくりを推進しようとしている町村は、寡聞にしても耳にしたことがない。農協関係では唯一、峰延農協だけである。穂別町がこうしたことの可能性を秘めているのも、産業がかつての木材・石炭産業が衰退して、人の移動が激しかったからではないだろうか。平場の厚真町や鷗川町は、いわば旧開拓純農村で人の移動が少ないからどうしても保守的、閉鎖的体質にならざるを得ないのである。

五、結び

今回の調査は、第一に初代横山

村長の賢治の精神を基盤とする村政の考え方が、どんな形で継承されているかを見たかったことであるが、リーダー層の中で今日も生き続けていることを知つて勇気づけられた。第二は、条件不利地域の中山間地にあつて、地域の活力をどのように引き出しているか、その実態を学びたかった。

穂別町においては、高邁なビジョンのもとに着々と町づくりが進められ、農業分野では「移動村づくり大学」への参加が起爆剤となつてゐることを知つた。町長のビジョンだけでは面餅に帰してしまつたが、関係機関の人づくり、農家の人づくりが町長のビジョンを具体化させる推進力になつてゐる。その人づくりは同時に情報の収集力につながつてゐるのである。「知佃革命」の時代と言われるが、穂別町のユニークな農業は、横山村長が遺した賢治精神の菩薩講と町長の先見性、地道な人づくりの努力、地域のまとまりのよさ等が総合的に働いて創造されてきたものと言へるだろう。

(旧開拓とは戦前の開拓のこと)